

Title	「ケニアにおけるマラリア撲滅を目的とした調査に参加して」
Author(s)	白石, 佳孝
Citation	目で見えるWHO. 2012, 50, p. 38-39
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/86746">https://doi.org/10.18910/86746</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



## 「ケニアにおけるマラリア撲滅を 目的とした調査に参加して」

大阪市立大学医学部医学科4年 白石佳孝

### ●はじめに

2011年1月19日から2月10日の約3週間、大学の修業実習として大阪市立大学医学部寄生虫学教室の金子明教授に同行してアフリカ・ケニア国を訪れました。



調査チームの集合写真

金子教授はマラリアを専門としておられ、今回はケニア・ヴィクトリア島嶼におけるマラリア撲滅を目的とした調査において、プロジェクトメンバーとして同行させていただきました。調査ではマラリアの感染を調べ、各種データ、サンプルを採取し、必要であれば治療まで行いました。

### ●調査の目的

近年のMDGs (ミレニアム開発目標) への対策強化傾向もあり、ケニア国の多くの地域ではマラリアの罹患率は大きな低下を見せています。しかし、その中でも依然として罹患率が50%を超えるといった高い値を示す地域が存在します。それが今回の調査地、ヴィクトリア湖の島嶼および周辺地域であり、今回はそれらの地域でのマラリア撲滅の可能性を調査してきました。

### ●調査の内容

ヴィクトリア湖島嶼に加え、湖周辺の集落(村)を含む4つの島と1つの集落で調査を行いました。調査の概要

としては、血液サンプルの採取、Hb値の測定、身長体重測定、脾腫検査、マラリア検査を行い、マラリア陽性の場合には投薬による治療を行うといったものでした。この調査は今後も定期的に継続して行います。血液の採取などの作業は現地の Clinical Officer が行い、僕たちはその補佐が主な役割で、帰国後は得られたデータの整理・解析に携わらせていただきました。



調査の様子

### ●地域住民の協力

調査にあたり、現地の方々への協力要請の為に、挨拶に出向きました。地域住民の方々には皆声を揃えて「来てくれて本当にありがとう」と言って下さり、またどの地域でも調査にすごく協力的で、多分に力をお借りしました。こういった現地の方々と共に活動することが、金子教授がいつもおっしゃっている Sustainability (持続可能性) の確立にとって重要なのだと、実際に現場に立ってみて強く感じました。

### ●気になったこと

調査を進めるにつれて、少し気になることが出てきました。順番待ちの方(特に若いお母さん)に「これはHIVの検査ではないよね?」と念を押して確認されました。今回はマラリアだけの検査だと伝えたのですが、これももしHIVの検査も兼ねていたら、彼女は検査を受けなか

ったのだろうか。ふと、そんなことが気になりました。



マラリア感染で脾腫のみられる子ども達

#### ●本当に必要なことは?

今回の実習では本当にいろんなことを考える時間があり、またたくさんの人の話を聞ける機会に恵まれました。そんな中で特に気になったのは「現地の方々にとって、本当に必要なこととはなんなのだろう」という疑問でした。



金子教授とケニアの子ども達

AIDS の例をとってみても、彼女たちは AIDS という病気の本当の怖さを正しく理解しているのでしょうか。実際にマラリアに関するアンケートを実施したところ、

予防や治療に関して正しく理解していない人がたくさん見受けられました。これは、正しい知識をみんなが共有できるように教育や保健的なサポートも必要なのではないか、と感じました。

#### ●実習を終えて

私は今回が初めての途上国経験でした。「現地の人に必要とされることを、現地の人と共にやる。ただ提供する訳じゃない、あくまで主役は彼らなのですから」言葉にするだけならこんなに簡単なことも、実際にその場に立ってみると、何が本当に必要なのかもわからなくなるくらい、難しく、そして大切なことだと感じました。

今回の実習で、私が医学生としてできることはすごく小さなことだけだったかもしれませんが、将来医師となった時に、自分に一体何ができるのか、自分はどんな形で彼らと関われるのか、そんなことを考える上で、今回の経験は私にとってとても大きな経験となりました。

今回の修業実習は、僕の「国際協力への第一歩」になりました。これからもたくさんの経験を積んでいきたいです。

末筆となりますが、今回の貴重な機会を提供して頂いた、金子明教授に深くお礼申し上げます。

